



ボールを持った人間が一番先頭に立つという勇気を試されるのがラグビーです

——ラグビーへの風向きが2015年のワールドカップからものすごく変わったと思うんです。

吉田 日本のラグビーが世界を震撼させた。それがすべてですね。2019年ワールドカップを日本で開催する前にインパクトを残すことができました。2015年の躍進、2016年のリオ五輪でのセブンズの正式種目と男女出場権獲得、2019年のワールドカップ日本開催、そして2020年東京オリンピックでのセブンズ。この5年間でラストチャンスだと思うんです。日本で子どもたちがラグビーを楽しめる環境を取り戻すために、この波に乗っているときに何をしなければいけないのかってことを考えますね。

——たとえば？

吉田 ラグビーの魅力をとだけ伝えられるか。環境がないから子どもたちにラグビーボールを触ってもらいたいんだと体験してもらおうチャンスがない。元々横浜はラグビースクールがたくさんあります。ただサッカースクールと比較するとものすごく少ない。

——横浜にラグビーのトップクラブが欲しいですね。

吉田 僕は学校体育、部活、体育会、そして実業団という日本独特のスポーツ環境を歩んできました。対して、Jリーグが発信した「Jリーグ100年構想」の総合型地域スポーツクラブ。当時の僕にとっては「何だ？」って話ですよ。その時は伊勢丹の社員でしたが、ものすごく興味を持ったんです。そこで1996年、筑波の大学院の修士課程で日本のスポーツ社会、もちろん世界のスポーツ環境も含めて、総合的なスポーツを勉強するため受験をし、

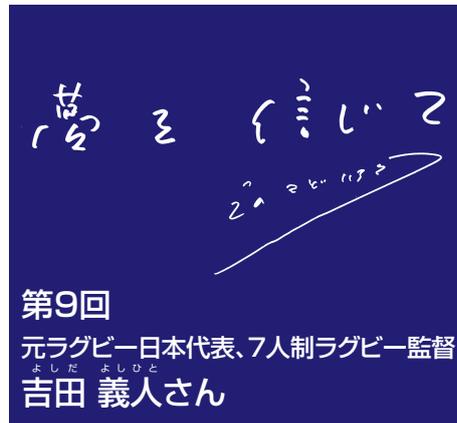
あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、元ラグビー日本代表、現在は7人制ラグビーチーム「サムライセブン」の監督を務める吉田義人さんです。

合格することができました。スポーツ経営学でドイツの総合型地域スポーツクラブの現状を学んで「これだ!」と。これを日本に取り入れなければいけない、未来の日本のスポーツを作る環境だと思いましたね。そしてのちに、伊勢丹がリーグから撤退をすることを決めるとき、僕はプロになるためフランスに渡りました。その理由は、アマチュアとプロの違いを学ぶこと、そしてこれからの日本のスポーツ界に必要な総合型地域スポーツクラブを学びたいという思いからでした。フランスで所属したUSコロミエはまさしくJリーグがイメージしているようなピラミッド型の組織で、子どもたちにスポーツの体験をさせてあげることこそが大切だと確信しました。

——どんな子がラグビーに向いていると思いますか？

吉田 今の子は喧嘩をしないですからね。やっぱり喧嘩が強い子がいいんですよ。

——気持ちの強さってことでですね。



吉田 ボールを持った人間が一番先頭に立つという勇気を試されるのがラグビーです。一番大事なのは負けん気なんですよ。立ち向かっていく勇気が絶対的な条件。チームスポーツは集団の中で活動します。競いあう中で学ぶ。どんどん競わせた方がいいんです。僕の研究論文にもゴールデンエイジの研究があって、児童心理学からも児童社会学からも紐解いて出した答えは集団生活することによって自分の立ち位置がわかりはじめ、将来、大人社会で生きていく術を身につけることができるということです。

——遊びとかスポーツで学んだ社会性みたいなものってというのは決定的ですよ、人生の中で。

セブンズはスペースがある分当たりに行かず、抜きに行くんです

——セブンズに対していろんな記事を読むと、現役時代にセブンズがオリンピック種目であったなら自分は7人制の選手になってたって吉田さんが断言されてて驚きました。雪の早明戦、スタンドで見てた僕からするとびっくりしますよ。

吉田 19歳ではじめて日本代表に選出されたときの国際大会が香港セブンズだったんです。今、野球界では大谷翔平選手が二刀流って言われていますが、ラグビーの世界にはそれ以前に二刀流があったんですよ。

——日本人にはセブンズが向いているとおっしゃっていますよね。

吉田 セブンズはアジリティとスピード勝負、あとは体幹の強さなんです。そこにラグビー特有の間合いが組み合わさるんですけど、日本人はどれも優れています。セブンズはスペースがある分当たりに行かず、抜きに行くんです。そこがセブンズの魅力のひとつですね。

——吉田さんは違う競技から選手を連れてくる可能性についても語ってますね。

吉田 サムライセブン発足して2年ですが、7人のレギュラーのうち4人が他競技出身です。陸上、アメリカンフットボールのランニングバック、バスケットボールですね。たった2年で今ではみんな小さい時からラグビーやってるんじゃないの、っていうようにしか見えないうらいセブンズのスペシャリストになっています。僕は9歳からラグビースクールでプレーしはじめましたが、同時に小学校ではバスケットボールの部活でプレーしていました。時々みんなチームを組んで遊ぶ野球やサッカーも楽しかったし、相撲もしょっちゅうやっていました。それこそがこの小柄な体でトップ選手までなれた要因だと思えますね。

——体、強いでもんね。

吉田 僕は秋田の男鹿半島ですーっと生まれ育って、大自然の中で遊んでましたから。体幹が自然にできたんですよ。僕がタックル受けても倒れなかったのはそこなんです。山登り行って、木登りして、夏は海で遠泳したり、砂浜走りまわったり。それは体幹つきますよ。清宮先輩がよく言っていました「吉田はタックルが決まっても倒れないって」。

PROFILE プロフィール

吉田 義人(よしだ よしひと) 元ラグビー日本代表、7人制ラグビー監督。1969年2月16日生まれ。秋田県男鹿市出身、横浜市在住。秋田工業高校、明治大学主将として共に全国優勝。19歳で日本代表入り。W杯2回出場。世界選抜に3度選出。また日本人初のプロラグビー選手としてフランス、日本でプレー。35歳で現役を引退後、指導者の道を歩む。2016年リオデジャネイロオリンピックから7人制ラグビーが正式種目に決定したことを受け、7人制ラグビーチームの監督として、オリンピックの育成、とその魅力を広めるため活動中。

取材を終えて

吉田義人はラグビー界にとって特別な存在だ。僕は2019年ラグビーワールドカップ決勝の地・横浜に、吉田さんが住んでおられたのを「天の配剤」のように感じる。翌2020年の東京オリンピック正式種目、セブンズも含めて、今、ラグビー界に地殻変動のような動きがある。その熱量を生む核のひとつは間違いなく吉田さんだ。もともとはお子さんの教育を考えて、緑の多い郊外に住まれたそう。横浜は本当にツイている。

